

長くつ下のピッピ



リンドグレン作
大塚勇三訳

アストリッド・リンドグレン
949 リンドグレン作品集 1

岩波書店 1964

262p 23cm 小学3・4年以上

内容：長くつ下のピッピ

(参考) Lindgren, Astrid : Pippi Långstrump, 1945.

長くつ下のピッピ

リンドグレン作品集 I

定価六五〇円

一九六四年十二月十六日 第一刷発行 ©

一九七三年七月一日 第十五刷発行

訳者 大塚勇三

絵 桜井誠

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

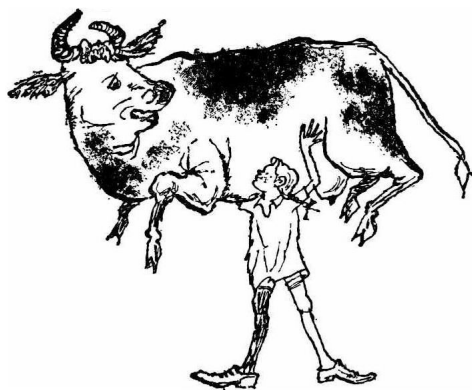
長くつ下のピッピ

——世界一つよい女の子——

リンドグリーン作品集I

大塚 勇三 訳

岩 波 書 店



PIPPI LÅNGSTRUMP

by

Astrid Lindgren

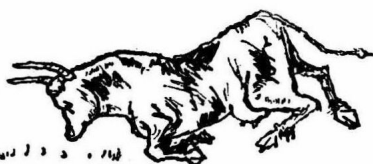
1945

Original Swedish edition published by Rabén &
Sjögren, Stockholm.

This book is published in Japan by
arrangement with the author.



もくじ



6	5	4	3	2	1
ピ ッ ピ、	ピ ッ ピ、	ピ ッ ピ、	ピ ッ ピ、	ピ ッ ピ、	ピ ッ ピ、
遠足 えんそく にいく………	門 もん にこしかけ、木にのぼる………	学校 がっこう にいく………	おまわりさんと鬼 おに ごっこをする………	もの発見家 はっけんか になり、けんかをする………	ごたごた ごた 荘 そう にひっこす………
120	98	74	57	31	9

7	ピッピ、サーカスに行く……………	144
8	ピッピ、どろぼうに、はいられる……………	167
9	ピッピ、コーヒーの会 ^{かい} によばれる……………	185
10	ピッピ、英雄 ^{えいゆう} になる……………	211
11	ピッピ、誕生日 ^{たんじょうび} パーティーをひらく……………	229
	訳者 ^{やくしや} のことば……………	259

さし絵
校
井
誠



長くつ下のピッピ

——世界一つよい女の子——

大塚 勇三 訳
リンドグレン 作

ピッピ、ごたごた^{そう}荘にひっこす



スウェーデンの、小さい、小さい町の町はずれに、草ぼうぼうの古い庭がありました。その庭には、一けんの古い家があって、この家に、ピッピ・ナガツシタという女の子がすんでいました。この子は年は九つで、たったひとりでくらしていました。ピッピには、おかあさんも、おとうさんありませんでしたが、ほんとのところ、それもぐあいのいいことでした。というのは、ほらね、ピッピがあそんでるさいちゆうに、「もう寝るんですよ。」なんていう人は、だれもいないのです。それから、「おかしがたべたいな。」とおもっているときに、「肝油^{かんゆ}をのみなさい。」という人

もないのです。

まえには、ピッピにもおとうさんがあつて、ピッピは、おとうさんがそれはそれはすきでした。そうそう、もちろんおかあさんだっていました。これはずうっとまえのことで、ピッピは、まるでおぼえていません。おかあさんがなくなったときには、ピッピはまだ、ちっちゃな、ちっちゃな赤んぼで、ゆりかごにねていましたが、あまりものすくなくきわめくので、だれもよりつけないくらいでした。ピッピは、おかあさんがいまは天てんの上うへにいて、天てんにあいたちいさな穴あなから、むすめのわたしをみおろしているのだ、と信しんじていました。で、ピッピは、ときどきおかあさんのいる空そらのほうに手をふって、いいました。

「わたしのこと、しんぱいしないで！ わたしは、ちゃんとやつてるから！」

ピッピは、おとうさんのことなら、よくおぼえていました。おとうさんは船長せんちょうで、ひろい海うみを航海こうかいしていたのです。ピッピも、おとうさんといっしょに、船ふねにのつていたのですが、さいごに、ある嵐あらしのとき、おとうさんは、海うみの中にふきとばされて、す



がたが見えなくなったのです。でも、ピッピは、おとうさんが、いつかはきっと帰^{かえ}ってくる、と信^{しん}じていました。おとうさんがおぼれ死^しんだなんて、かんがえもしませんでした。きつとおとうさんは、黒人^{こくじん}がわんさという、どこかの島^{しま}にながれついて、黒人^{こくじん}たちの王^{おう}さまになり、頭^{あたま}に黄金^{きん}の冠^{かんむり}をかぶって、一日じゅう、ぶらついているんだわ、とピッピは信^{しん}じていました。

「わたしのおかあさんは天使^{てんし}で、おとうさんは、黒人^{こくじん}の王^{おう}さまよ。こんなすてきな親^{おや}をもった子なんて、そんなにいやしないわ!」と、ピッピは、まったくまんぞくそうに、いつものうのでした。「それで、おとうさんは、船^{ふね}さえつくってしまったら、すぐわたしをむかえにくるの。そして、わたしは、黒人^{こくじん}島^{とう}のお姫^{ひめ}さまになる。わーい! なんてすてきなことだらう!」

庭のなかの古い家は、おとうさんが、なん年もまえに買っておいしたものでした。おとうさんは、じぶんが年とって、海にのりだすことができなくなったら、ピッピといっしょにその家に住むつもりだったのです。ところが、おとうさんは運わるく海のなかにふきとばされてしまったし、ピッピのほうは、おとうさんがきつと帰ってくるとおもっていました。そこでピッピは、まつすぐに、「ごたごた荘」にかえることにしました。そう、これが家の名なのです。家には、もう家具もはいつて、ちゃんとできあがり、いつ行ってもいいようになっていたのです。

さて、ある晴れた夏の夕がた、ピッピは、おとうさんの船の、乗組員みんなに「さよなら」をしました。みんなはピッピがとてもすきでしたし、ピッピも、みんながとてもすきでした。

「みんな、さよなら！」

ピッピは、ひとりひとり順番に、おでこにキスしながら、いいました。

「わたしのこと、しんぱいしないで！ わたしは、ちゃんとやっていけるから！」



ピッピが船からもってきた荷物^{にもつ}は、ふたつでした。ひとつは、「ニルソッ氏^し」という、ちいさなサルで、これはおとうさんからプレゼントにもらったサルでした。もひとつは、金貨^{きんか}がぎっしりつまっているスツケースでした。

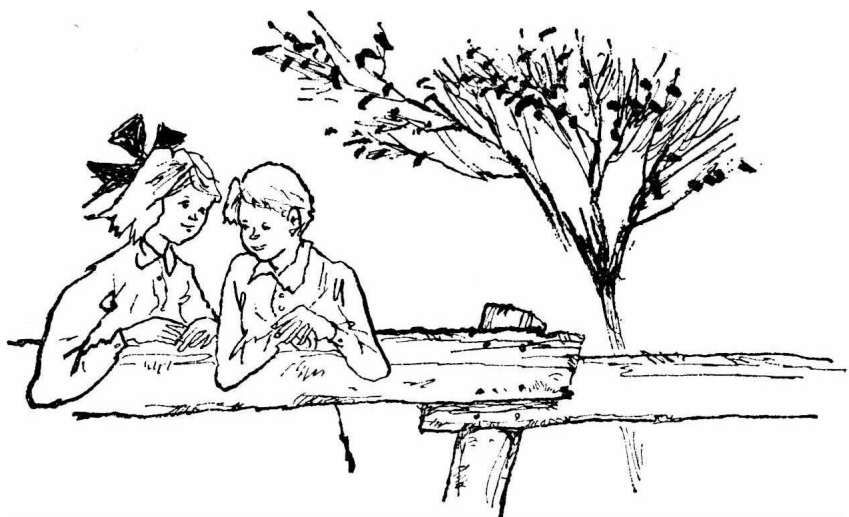
船員^{せんいん}たちは、甲板^{かんぱん}の手すりのわきにならんで、ピッピのすがたがみえなくなるまで、

あとをみおくっていました。ピッピのほうは、ニルソン氏を肩にのせ、スーツケースをしつかりと手にさげて、いっぺんもうしろをみようとしてもしないで、どンドン歩いていきました。

「いや、たいした子だよ。」

ピッピのすがたがみえなくなったとき、ひとりの水夫はそういつて、目のなみだをふきました。

ほんとに、そうです。ピッピは、とてもたいした子でした。いちばんたいしたところは、ピッピがとても力もちなことでした。それは、ものすごい力があって、世界じゅうのどのおまわりさんがかかっても、とてもかなわないくらいでした。ピッピが「もちあげよう」とおもえば、馬を一頭、まるごともちあげられるくらいでした。ところで、じつさいに、ピッピは、「もちあげよう」とおもったのです。ピッピは、ごたごた莊にかえった、その日に、たくさんある金貨のうちから一まいとりだして、それで馬を一頭買いました。ピッピは、まえから、じぶんの馬がほしくてたまらなかった



のですが、いまでは、玄関げんかんの前のベランダに、ちやーんとじぶんの馬うまがいるのです。ところで、ピッピは、そのベランダで午後のコーヒごごーを飲のみたいな、とおもうときは、馬うまをちよいともちあげて、そとの庭にわにおくのでした。

ごたごた荘そうのとなりには、もうひとつべつな庭にわがあつて、もうひとつべつな家いえがありました。この家いえには、おかあさんとおとうさん、それと小さな、いい子がふたり、……男おとこの子と女の子とが、住すんでいました。男おとこの子の名なはトミー、女の子の名なはアンニカです。ふたりは、氣きだてがよくて、しつけもよく、いうことをよくきく子でした。トミーは、つめをかんだりしませんでしたし、おか